

《短 信》

「駿国雑志」にある文音調記述

山口 幸洋

文化十四年（二八一七）から天保十四年（一八四三）にかけて完成された「駿国雑志」（著者・阿部正信）中の方言記事の資料的価値については、日野實純氏「駿国雑志」所収の方言」（昭和53年10月、大修館書店「日本の言語学」（第六卷月報））が紹介された通りである。くわしくはそれにゆずる。

私は同書「俚言」の項にさきだつ「風土氣候」の項の次の文言に注目した。すなわち、

熟^{てうじゆ}、里俗の風を見るに、言語は平上^{へいじやう}ありて去入^{きよにり}少く、四聲^{しじやう}缺^{けつ}るが故に、呂津^{りしん}清濁^{しやうたつ}自然と^{しぜん}のふらず、口調^{くちやう}後^ごあがりにして早^{はや}し。いはゞ呼吸^{こくそく}まく者の強^{ちやう}て言^{ことば}に似^にたり。

とあるのは、静岡市在の方言の文音調に触れているのではないかと思われる。静岡地方は旧来、山地方言の文音調を殊更言いたてる習慣がある。駿河と遠江の国境山地である大井川上流および葭科川（安倍川支流）上流地域の方言を指す呼称ギラはその一本調子の文音調を指す呼称でもある。周辺の非ギラ地区の人達はよく口真似をして聞かせてくれる。「泣くようなものはいいかた」「引する」「けんかしているように早口」「尻上がり」だともんな言う。静岡市の場合それは葭科奥の旧清沢村、旧大川村そして安倍奥の旧井川村の人達のことばである。あの村はギラを使う、あの人はギラを使うと評判することは昔よくあった。方言意識の対象が文音調である例は

全国各地にあるとしても、当地方ではそれをいう普通名詞をもつ（ギラという語自体のアクセントは無核型。これを最近、頭高型にいうのはそれだけこの語およびその觀念になじみがうすまったせいとみる）。「駿国雑志」はギラということばこそ使っていないが、特に文音調をとりたてて言っているのはそれを指している可能性が高い。「四聲^{しじやう}缺^{けつ}る」とはアクセントの区別がないということであり、駿府在のギラは方言学でいう一型アクセントに間違いのないのであるから、「駿国雑志」は静岡県に存在する一型アクセントに初めて触れた文献であるということになる。

ギラ地域が今より広まっていたかどうかはわからないし、「駿国雑志」の記述からもそれは知られないが、旧大川村の大工人夫などが駿府（静岡市）の浅間神社造営（文化元年着工、慶応四年竣工）にたずさわっており、一方、民間習俗の記述にも意をつくしている同書の編纂姿勢からみて、著者が実際に地元民達と接触したことは大いに想像される。それはまた同書「俚言」の項に収録された方言の描写にもあらわれている。

方言としては「駿府御番衆覚書」と「物類称呼」からの引用になる四十二語と、直接に採集されたと思われる一〇九語が掲げられている。私が静岡市の話者（曲金町明治38年生れの男性）にたしかめた（昭和52年6月）ところでは、現在でも使用する語は前者の文献由来のもの四十二語中六語に対し、後者の直接採録のもの一〇九語中五十六語（内七語は語形が少し異なるものを含む）および静岡県内他所で使用のもの九語である。このことは文献から転載したものは当時すでに死語化しているものがあるにしても、著者採集分は現在でもじゅうぶんに資料として活用するに足るほど写実的なもので

あることを意味する。

俚言といつても、

ず……食をくはず、吞をのまず、行をゆかず、取をとらず、など

云へり。江都の人食ふ、ゆかう、と云ふに同じ。又かうせず

い、そうせず、なども云へり。

のような辞や、

ばつ……言葉の留りをつめて云へり。江都の人、をやくくけしか

らぬ、或はをやどうしやう、など云所に用る言葉なり。

ゑれく……これはくと云所にも、やれやれと云所にも、もし

くと云所にも用ゆ。みな言葉を発せんとする時、まづかく云

て、後其云べき事を云へり。是自然の冠詞なり。

ゑれちやあ……ゑれは、かの発言にして、愛する意あり、歎息の

意もあり、江都の人、やれくはや、といふに同じ。

などの感動詞も含まれている（なお、バツあるいはパーッという

のは現在、静岡県内海岸部にある。エレエレは静岡市内で確認。文

末助詞的なチャは山村部にある）。また、

いじやてゆかず……諸共に行んと云意なり。江都の人、一所にゆ

かふと云に同じ。

しつけ……こふしつけなど云へり。かふふなされたげなの略言に

して、江都の人、こふだつけ、そふだつけ、など同じ。

えひかんばんげだらふ……日暮方を云へり。得如何、晩景ならん

なるべし。えいと、かんと言葉を分ていふ故に、すこしきくに

くし、府辺は此詞なし。

めしをけへ……飯を喰へと云事なり。けへは、くへの転せる成べ

し。くとけと五音通じる。

などとある成句のなかにみられるイジャ（「行こう」の意味）、シ
ツケ（「する」の過去形）、エーカン（いい加減）、パンゲダラー（腕
方だろ）、ケー（食え）などの語句もまさに県内各地に現存する
ものである。

「駿国雑志」が方言研究上貴重なものであることについて日野氏
御指摘以外につけ加えるまでもないことながら、駿府在郷部の文音
調に関する記述があること、そしてその観察根拠は著者自身の写生
であろうとする次第を述べた（以上の引用は吉見書店旧翻刻本によ
った）。

（昭和五十八年一月十七日受理）